

ライプニッツ『形而上学叙説』における 「個体的実体」論について

清水 洋 貴

はじめに

ライプニッツにおける「実体」の存在性格やその理論的な役割を精確に見極めたい。そのためには、つぎのような問いに向き合わねばならないように思われる。すなわち、『形而上学叙説』(一六八六年、以下『叙説』と略記)における「個体的実体」論と、『実体の本性と実体相互の交渉ならびに魂と身体との合一についての新たな説』(一六九五年、以下『新たな説』と略記)における「実体」論および『モノドロジー』(一七二四年)における「モノド」論とは、どのような関係にあるのか。「個体的実体」と「モノド」というこの両者は、完全に同一視してよいのだろうか。

私見では、上記の二種の「実体」論は、ともに「実体」の確保が目指されながらも、それぞれにおいて、「実体」が掴み出される際の手続きが異なっており、その帰結として、確

保された「実体」の存在性格も異なっている、と理解されねばならないように思われる。

それぞれの「実体」論の特徴を簡潔に述べれば、つぎのようになる。

『形而上学叙説』において構築されるのは、「イデア」「觀念」(idée)あるいは「概念」(notion, concept)をその理論的な核とする「実体」論である。ここでの「実体」は、簡潔に言えば「神」が「満たされ終えた」(accompli)仕方で「個体」を「観る」(voir, contempler)というものの「下に立つもの」である。こうした「実体」論は、西洋哲学史の系譜としては、「個のイデア」あるいは「個のラチオ」の形而上学¹⁾に属している、と評価できるだろう。

これに対して、後期の「実体」論あるいは「モノド」論では、「実体」あるいは「実在」(existence)の「本性」(nature)あるいは「形相」(forme)、「本質」(essence)を何らかの仕方

で掴み取る、ということが課題とされている。たとえば、『新たな説』の「実体」論の出発点に置かれ、「実体」のいわば中核に位置するのは、まずは「統一」「一性」(unite)であり、さらには「点」(point)である。この「実体」はつぎのような手続きを経て正当化される。すなわち、「形而上学的な点」は、「真なる」(veritable)、「リアルな」(real)「生きた」(anime)「点」と特徴づけられたうえで、「数学的」および「物理的な」点から語り分けられる。「統一」および「点」をめぐるこうした議論の延長線上に、「単純な実体」としての「モノイド」は登場するようになるであろう。

本論文では、『形而上学叙説』における「個体的実体」論の構築の手続きを明らかにしたい。その説明を通じて、「個体的実体」の性格が露わになるであろう。

第一節 アリストテレスによる「実体」の 定式への評価（第八項）

まず注目されるべきは、「完全に満たされた」(complet) という形容詞である。フィクションによれば、そもそも「実体」の伝統的な把握においては、「実体」は「完全に満たされた存在」(un être complet)である、と考えられてきた。「存在」について「完全に満たされた」という基準が適用されて、「実

体」は確保されていたのである。これに対して、この形容詞は、ライプニッツによつて、「存在」から「概念」へと移される²⁾。それは一六八〇年代の初頭のことである。『叙説』においてライプニッツは、「実体の完全に満たされた概念」(la notion complète de la substance) という理論の構築へと向かうのである。つまり、『叙説』における「個体的実体」論の核を成すのは、「存在」ではなく、「概念」なのだ。

以上のような見通しを念頭におきながら、『叙説』の議論を見ていくことにしよう。「個体的実体」をめぐる議論は、第八項から開始される。その端緒を開くのは、「基体」(sujet)と、「能動作用」および「受動作用」をめぐる問題である。

「能動作用と受動作用とは、本来、個体的実体に属する（作用は基体に属する）のであるから、このような実体とは何であるかということを説明する必要がある」（『叙説』、第八項）。

ここでは、「作用は基体に属する」というスコラ哲学の公理が継承されつつ、「個体的実体」論が構想されている。このスコラの格言は、「能動作用」を、その基礎 (support) へ導き、さらには「個体的実体」へと導く³⁾。すなわち、作用が属する「基体」が「実体」として仕上げられるのである。「個体的

「実体」は、「能動作用」と「受動作用」が属するところのものである。この意味で「実体」は、能動作用をなしうる存在 (un être capable d'action) であるだろう。

しかしながら、「作用が属する」という指摘だけで「実体」は探り当てられるわけではない。なぜなら、「神の能動作用と被造物の能動作用とを区別する、ということとはそうとう難しい」からである。こうした問題に、ライプニッツはここで直面している。すなわち、或る「能動作用」を複数の「被造物」のうちのどれに帰するか、ということではなく、そもそも、「被造物」と「神」のうちのどちらに「能動作用」を帰属させるのか、というこのことが、まさに決着しがたいのである。

ところが、ライプニッツは、こうした問題を提起しておきながら、『叙説』においては、「物体」の実体という問題へと分け入るということなく、「実体」を論理的に確定するという道へと突き進んでいく。こうした文脈において、アリストテレスの「実体」論が、理論構築の下敷きとして引き合いに出される。

「たしかに、いくつもの述語が同一の主語に帰属し、この主語がいかなる他の主語にも帰属しない」というとき、この主語が個体的実体と呼ばれるのは正しいけれども、

これだけでは十分でないし、こうした説明は唯名的なものにすぎない。そこで、或る主語に真に帰属されるというのはどういうことなのかを考える必要がある」（『叙説』、第八項）。

「実体」を、「いくつもの述語が同一の主語に帰属し、この主語がいかなる他の主語にも帰属しない」ものである、と定義するのは、アリストテレスである。この定式化では「十分ではない」とライプニッツは評価する。この説明は「唯名的」だ、と言うのだ。

なるほど、こうした「実体」の定義において、或る「主語」は他の主語から区別されるであろう。だが、「実体」とみなされる「主語」は、「いかなる他の主語にも帰属しない」という否定的な仕方で特定されているにすぎない。こうした主語は、もはや述語づけられることのない「主語」という仕方で割り出されているだけ、なのだ。ライプニッツからすれば、この「主語」は、「いくつもの述語」(plusieurs prédicats) が帰属するというだけで、すべての述語が「完全に満たされて」いるわけではない。ライプニッツに言わせれば、実体についてのこの定義に則っているかぎり、名としての、或る「主語」と、名としての他の「主語」とが分かれていてにすぎない。こうした意味において、このアリストテ

スの定義は「ノミナル」だ、と評されるのである。ここでの「ノミナル」とは、結局のところ、この「実体」についての定義は、狭義の論理学的な範囲内に留まっている、ということであろう。こうした区別の仕方では、単なる論理的な「主語」がそのまま「実体」である、とみなされてしまう。「実体」は、このように解されてしまうならば、論理的な基体、つまり論理学の範囲を出ない「主語」でしかなくなってしまう。これでは事足りない、とライプニッツは自らの論を進めているのである。

「主語」についてのアリストテレスの見方とは、つぎのようなものである。そもそも、アリストテレスにおいて、主語となるものは、述語によつてこれから説明されるべきものである。つまり、まだ説明されていないもの、未知なるものである。述語づけがなされるほどに、「実体」の一つの性格、すなわち「もとに置かれてあるもの」すなわち「基体」としての性格は判然とする。この背景には、それ自体は絶対的に述語とならないような「主語」としての個物と、何らかの仕方です語となりうるものとしての普遍との対比が前提されている。こうした「主語」および「述語」についての見方がアリストテレスの「実体」論の根底に存している。

アリストテレスによる「実体」の定義と直面したとき、「実体」探索の課題であるように見えるのは、述語とならない主

語と、述語とのあいだに一線を画す、ということであるように思われる。しかしながら、この線引きは、ライプニッツにおける「実体」探索では、手順としての一段階であつて、最終的な課題ではない。この点については、第四節で考えてみたい。

第二節 「或る主語に、真に帰属される」とは、どういうことか（第八項）

アリストテレスの「実体」の定義への評価に続いて、「実体」の探求はつぎのように推し進められる。「或る主語に真に属するというのは、どういうことなのか」。この発問を出発点とし、この発問に応答することを通じて、或る「主語」が「実体」と認定される条件が見定められる。

「ところで、真なる述定は、事物の本性のうちに何らかの基礎を有する、ということは確実である。そして、或る命題が自同的でない場合、つまり述語が主語のうちに明らかな仕方で (expressément) 包括されていない場合には、述語は主語に潜在的に (virtuellement) 包括されているはずである。哲学者たちは、これを内在と呼び、述語は主語の内に在る、と言う。したがって、主語

に属する項辞 (le terme du sujet) は、述語に属する項辞をつねに内に含んでいなくてはならず、したがって、主語に属する概念 (la notion du sujet) を完全に知解する者は、述語が主語に帰属する、と判断することにもなるろう」(「叙説」、第八項)。

「真なる述定は事物の本性のうちに何らかの基礎を有する」という引用冒頭の一文は、たとえばドゥンス・スコトゥスにおいても見いだされるテーゼである。スコトゥスにおいて「本性」は、「共通なもの」と呼ばれ、それ自体では「個別者」でも「普遍者」(universale) でもない、とされる。「共通なもの」としての「本性」は、知性の外に在っては個別化の原理によって「このもの」となり、知性の内では知性のはたらきによって「普遍者」として知解される。「普遍性」(universalitas) という性格は、知性の述定作用のうちで本性の概念が「多数のものに述語される」ということによつて、現実態化する。

しかしながら、たとえこうした定式が、スコラ哲学に見いだされるとしても、ライブニッツは、このテーゼの提示だけで「真なる述定」と「事物の本性」との関係の揺るぎなさを認定することはない。なぜなら、「感覚」と「知性」という能力に基づく認識対象の区別、「形象」の受容、能動知性による「抽象」といった「認識」理論、さらには、「知性」の

内と外といった、スコトゥスにおいて「述定」と「事物の本性」とを繋ぐ理論的な枠組みは、もはやライブニッツにおいて採用されていないからである。したがって、「述定」が「真なる」ものであるのは「事物の本性」に基礎を有するからだという先の定式は、新たな理論によつて保証されなければならない。ただし、この定式は、ライブニッツにとつて、到達されるべき結論である。

それでは、「真なる述定」は「事物の本性」に根ざすというこの定式は、どのような手続きの提示によつて保証されるのだろうか。この定式は、「或る命題が自同的でない場合、つまり述語が主語のうちに明らかな仕方含まれていないという場合」の検討を通じて保証される。

なぜこの「場合」だけを検討すれば、それで済むのか。

まず確言できるのは、或る命題が「自同的」であるというこの場合は、改めて考慮しなくてよい、ということである。なぜなら、「自同的」な命題は、狭義の意味での論理学の範囲内で処理されうるからである。この場合には、主語の項辞から述語の項辞が、もっぱら論理学の規則に従つて導出される。

これに対して、非自同的な命題においては、論理学の規則を用いるだけでは、主語項辞から述語項辞は導出されない。つまり、「述語」が「主語」に真に述べられている、と言う

ことはできない、あるいは、「主語」から「述語」は導き出されえない。

ここにおいて、ライプニッツはつぎのような立場を打ち出す。すなわち、この場合には、「述語は主語に潜在的に包括されている」と考えられねばならないのだ、と。なぜなら、何らかの「事物」について「命題」が形成されているのであれば、たとえ、命題としてそれが非自同的であるとしても、その命題の「主語」について、「真なる述定」がいつでも可能であらねばならないからである。

第三節 論理学的視点と形而上学的視点

ここからこの議論は、つぎのような場面へと飛躍する。前節の引用文の最後の箇所を、もう一度、引いておこう。

「したがって、主語に属する概念 (*la notion du sujet*) を完全に知解する者は、述語が主語に帰属する、と判断することにもなるう」(「叙説」、第八項)。

「主語に属する項辞」は、「述語に属する項辞を、つねに内に含んでいなくてはならない」。だがしかし、このことは、「主語に属する項辞」においては保証されえない。というの

は、非自同的な命題の場合には、主語(という項辞)から述語(という項辞)は導出されえないからである。そこで、ライプニッツは、主語項辞が述語項辞を内に含むという「項辞」の水準においてではなく、「概念」という新たな場を設定し、「述語は主語の内に在る」というテーゼに、理論的な保証を与えようとする。

述語が主語に「内在する」ということは、主語をいわば外から包括するように、完全に眺め尽くす視点によつてのみ、保証されうる。それが、「主語の概念を完全に知解する者」の視点である。主語の「項辞」の主題化によつては、「述語は主語に潜在的に包括されているはずだ」、というところまでしか、主張することができない。完全に知解する者の眼差しは、主語に属する「項辞」ではなく、主語に属する「概念」へと向かわねばならないのだ。

いま試みとして、主語の「項辞」と述語の「項辞」との包含関係を問題にする水準を「論理学」の視点と呼び、これに対比的に、「主語に属する概念」を問題にする観点を、「形而上学的」と呼ぶことにしたい。

ここでの「概念」は、命題の「項辞」、すなわち「主語」や「述語」という「項辞」と同一視されてはならない。むしろ、つぎのように解されるべきである。「項辞」は、狭義の論理学の用語であるのに対して、「概念」は、ここでは、形而上学

の用語であるのだ、と。「真なる述定」の内容は「事物の本性」に根ざしている、ということが保証されるのは、「項辞」においてではなく、「概念」において、である。「真なる」というこの形容詞は、主語項辞と述語項辞から成る「命題」と、「事物の本性」との関係を示している。言い換えれば、述定される内容が事物の本性に根ざしている、ということが、述定が「真」である、ということなのだ。

「事物」の本性をめぐる以上の議論から、いよいよ、「個体的実体」の本性をめぐる立論へと移行する。

「そんなわけで、一つの個体的実体の本性、すなわち一つの完全に満たされた存在の本性 (la nature d'une substance individuelle ou d'un être complet) は、一つの満たされ終えた概念 (une notion si accomplie)」、すなわちこの概念が現に帰属される (à qui cette notion est attribuée) 主語が有するすべての述語を包括的に把握したり、またそれらの述語を主語から演繹させるのに十分な (suffisante) ほどに満たされ終えた一つの概念を有することである、とわれわれは言うことができる」(「叙説」、第八項)。

「真なる述定」の内容は、「事物の本性」に基づいている。

この前提から出発して、その道すがら、非自同的な命題における「真なる述定」の確保というところまで辿られてきた。そこからいまや辿り着いたのは、「真なる」述定を保証するのは、「個体的実体の本性」である、ということである。「事物」のなかでも、「個体的実体」だけが、述語の主語内在に現に実現している。こうした枠組みが示されている。

それでは、「一つの個体的実体」ないしは「一つの完全に満たされた存在」の「本性」とは、何であるか。それは「満たされ終えた概念」を有する、ということである。

ここで、まず第一に注目されねばならないのは、「個体的実体」が「完全に満たされた存在」と言い換えられている、という点である。「実体」が「存在」という名詞へ置換されるならば、その「存在」という名詞は、「完全に満たされた」(complet) という形容詞で修飾されるのだ。

第二には、こうした「実体」ないしは「存在」の本性は、「概念」を有すること、とりわけ、「満たされ終えた」(accompli) 概念を有することだ、と明示される、ということである。「実体」は、「完全に満たされた存在」である、と言い換えられるだけでは、もはや確保されえない。これが、ライブニッツの診断である。「概念」が「満たされ終えた」仕方で把握される、という「本性」「生まれ」の開示という場面から、「存在」は「完全に満たされた」という形容詞

を獲得し直しているのである。すなわち、「実体」ないしは「存在」の「本性」「生まれ」が、「概念」を「満たされ終えた」仕方で「概念把握する」者であることが、明らかにされねばならない。これが、彼が示した処方であった。この意味で、『叙説』における「個体的実体」は、当然ながら「存在」に定位しながらも、「概念」をその始源的な中核とする、と評価されねばならないように思われる。

もう一点、重要なことは、つぎのことである。すなわち、非自同的な命題における「真なる述定」の保証と、「個体的実体の本性」の開示とは、「われわれ」に、等根源的にもたらされる、ということである。「個体的実体の本性」の暴露と引き換えに、「真なる」述定の保証が「われわれ」にもたらされる。非自同的な命題における「述定」の真性「真であること」は、「個体的実体」の「生まれ」において保証されている。言い換えれば、非自同的な命題における「述定」の真性の根拠の追求を通じて、「個体的実体の本性」、すなわちその「概念」が「満たされ終えて」いる、ということに辿り着くのである。

最後に、「個体的実体」論における「概念」の役割を改めて確認しておこう。

「ところが、神が、アレクサンダーの個体的概念、つま

りこの性 (hecceté) を観るとき、彼について真に語られうるすべての述語 (tous les prédicats qui se peuvent dire de lui véritablement) 、たとえば、彼はダリウスやポルスに勝つだろう、といったことの基礎や理由をそこに同時に観るので、彼は自然の死に方をするのかそれとも毒殺されるのかといった、われわれには歴史によって (par l'histoire) しか知る (savoir) ことができないことを、ア・プリオリに (すなわち、経験によらずに) 認識する (connaître a priori (et non par expérience)) ことができる」(『叙説』第八項)。

「個体的概念」は、「神」が「観る」ということによって成立する。「個体的概念」を「観る」とは、「アレクサンダー」について「真に語られうるすべての述語」や、或る一つの出来事・「基礎」や「理由」を、この「概念」のなかに「同時に観る」ということである。「個体的概念」およびそれを「本性」とする「個体的実体」をめぐる理論の有効性は、全知全能なる「神」の観点からのみ保証されるのである。或る人物について「真に語られうるすべての述語」を「われわれ」は、「歴史を通じて」しか「知る」(savoir) ことができない。これに対して、「神」は、「経験によらずに」すなわち「ア・プリオリに」「概念」のなかに、すべてを「同時に観る」。この

場合の「観る」とは、厳格に言えば「概念」とは区別された「イデア」「観念」を有するという場面に相当するように思われる。

第四節 完全に見分けられうる「存在」としての「個体的」実体と、ものを見分けることができる存在としての「われわれ」

ところで、なぜライブニッツは、アリストテレスの「実体」論の範囲に留まることができなかったのか。第二節の冒頭に提起した問題について、すこし考えてみたい。

アリストテレスによれば、「この馬」や「ソクラテス」は、絶対に「述語」の側に回ることはない。それによって複数のものがそれぞれに「ソクラテス」であるような「ソクラテス」一般、あるいはソクラテスの「イデア」のようなものは、考えられない。たとえば、「馬」や「動物」、「人間」という名であれば、それらは、「このもの」や「この人」といった複数の主語に述語づけられうる。たとえば、「このものは馬である」と言うことができる。これに対して、「この人」として指示されるところの「ソクラテス」が述語となる、ということはありえない。以上のような意味で、「このもの」としての「この馬」や、「この人間」としての「ソクラテス」は「第

一実体」である、と言われるのである。

ここで言われる「第一実体」とは、ソクラテスという名前ではない。「このもの」と指し示すことができるような「この人」、すなわち「ソクラテス」という名の、当の人物こそが「第一実体」である。たとえば、同名の人が二人いたとしても、このソクラテスと、あのソクラテスとは、それぞれに「実体」である。この場合でいえば、固有名が指すもの、それが「第一実体」である。「第一実体」は、狭義の論理学における単なる主語ではないのだ。

アリストテレスにおいて、「このもの」としての「第一実体」は、「質料」と「形相」との「結合体」であり、可感的な仕方では出会われる存在である。別の言い方をすれば、「個物」としての「実体」の範囲は、指示しうるものに限定されている。

これに対して、ライブニッツが直面するのは、指し示される「このもの」という基準では、「実体」が認定できない、という場面である。たとえば、自分の夫と、見た目が酷似し、言動においても完全に成りすました男がいたとき、妻は自分の夫を指し示すことができない。あるいは、或る資料に登場する紛らわしい二人の歴史上の人物がいた場合に、両者は同一人物なのか、それとも、別の二人の人物であるのかを決めることができない。

見分ける、あるいは、区別するということ。がなしているならば、日常的な意味で、「このもの」として「第一実体」を指示することができる。だがしかし、上のような事例では、そもそも見分けることができない。ここに、アリストテレスを超えて、ライブニッツにおける「実体」が「個体的」であり、それが「満たされ終えた概念」を「本性」「生まれ」とすることの意義が存するのである。

見分けるという機能の無効停止あるいは不全は、いわば、むこうとこちらとで解消されねばならない。すなわち、一方で、「見分ける」ことができるような存在論的な構えを「存在」の側が具えている、ということ。他方で、そうした「存在」の構えを「われわれ」は現に「見分ける」ことができること。こうした二つの解決が要求される。前者への解決が、「実体」は、その「概念」が「神」によって「満たされ終えた」仕方では把握されているという「本性」を有する、という理論の呈示である。これに対して、後者の問題は、「リアルな定義」をわれわれが現に示すことができる、という「定義」論のなかで論じられる。

第五節 「リアルな」定義の届かぬところ で成立する「個体的な」概念。あるいは、 リアリティと個性との隔たり。

「個体」についての「概念」を、「われわれ」は、「満たされ終えた」仕方では握むことはできない。「われわれ」は、「イデア」を有しており、「イデア」をいわば源泉として、「概念」を現に握むことができる。とはいえ、「われわれ」は、「満たされ終えた」仕方では握むことはできない。「われわれ」は、或る「事物」の個性性「個体であること」を概念把握することはできないのである。

これに対して、「われわれ」にできるのは、或る「事物」の可能性「可能であること」を「定義」として握む、ということである（『叙説』、第二十四項）。或る「事物」の「可能性」を「定義」として示すというのは、「リアルな定義」を下す、ということである。「リアルな」定義とは、「事物」の「可能性」を保証するような「定義」のことである。さらに、その定義は、単に名前において或る「事物」を他の「事物」から区別するだけの「ノミナルな」定義ではなく、「事物」について述べている「定義」である。したがって、「定義」と「事物」の「可能性」というこの両者は、「リアルな」定義が形成されるならば、事物の「可能性」あるいは「不可

能性」が明示される、という関係にある。こうした意味での「リアルな」定義を、「われわれ」は形成できる。その源泉は、われわれが「事物」を「観る」ことができること、すなわち「イデア」を有する、ということに存する。

以上を踏まえたならば、「個体的概念」と、「リアルな定義」との関係は、つぎのように整理されよう。

或る「事物」の「概念」が「満たされ終えた」仕方では「概念把握される」という「本性」を根拠として、「個体的実体」の成立は確認される。こうした手続きに基づいて、或る「事物」は、その「概念」を基準として、単なる「主語」ではなく、「実体」である、と認定される。こうした概念把握は、「神」によつてのみ、なされうる。こうした保証を、「われわれ」は与えることができない。

これに対して、「われわれ」がなしうるのは、事物の「可能性」を概念把握し、「事物」についての「定義」を下す、ということである。不可能な事物から可能な事物を分ける、ということとは、「われわれ」にもなしうるのだ。ここでは、「満たされ終えた」仕方では「概念把握する」という必要はない。われわれの知的な営みは、或る事物の「概念」を「満たされ終えた」仕方ではなく、事物の「概念」に基づいて、事物の「可能性」を定義として下す、ということである。つまり、「リアルな定義」を下すということに、「われ

われ」の営みは制限されている。

「個体的概念」と「リアルな定義」との以上の対比から、つぎのことが指摘できよう。「われわれ」が事物の可能性を「定義」の形成において明らかにする、ということは、「個体」を掴むことには届かない、ということである。個体の「概念」は、リアルな「定義」のうちに収まらず、その射程を超えている。「個体」とあるということは、「リアル」であるということを超えている。「定義」を超えたところに、「個体」は「実体」として、ないしは、「実体」は「個体」として成立するのである。

結論

最後に、本論稿の要点をまとめておこう。

1. 『叙説』において、「個体的実体」は、「リアルな」存在として取り押さえられてはいない。そうではなくて、「実体」は、「一つの完全に満たされた存在」(un être complet)として捉えられている(二十三項)。

2. 『叙説』において、「個体的実体」は、その「本性」「生まれ」が言い当てられて、捕捉される。その「本性」とは、「個体的実体」は「満たされ終えた概念」を有する、ということである(第八項)。「本性」の開示は、「神」への言及(神

による概念把握」を不可欠とする。

3、「満たされ終えた」仕方で「概念把握」ということは、「われわれ」にはできない。「われわれ」がなしうるのは、不可能な「事物」から「可能な」事物を分け隔てて、「可能な」事物の輪郭をはっきりとさせる、ということである。「われわれ」は、「リアリティ」「事物について述べているということ」を「定義」の提示において決めていく。「リアリティ」は、われわれが「定義」を示すなかで明らかにされ、決定されるのだ。「リアルな」定義と「ノミナルな」定義とを分かつことで、はじめて、可能な事物、すなわち、さまざまな「事物」のなかでも「われわれ」が「真に受けるべき」事物が、不可能な事物から際立たせられて、その輪郭を頭わにするのである。この「定義」論の観点からして、アリストテレスによる「実体」の定義は「ノミナル」と判定されたのだ、と言えよう。

4、『叙説』において「実体」は、「われわれ」が示しうる「リアルな定義」の範囲を超えて、「神」によって「満たされ終えた概念」の属する「主語」として成立する。このことは、われわれによって「定義」の「リアリティ」「リアルであること、事物の内容であること」は決せられうるが、「概念」は「満たされ終えた」仕方で把握されない、ということの意味する。

5、「概念」が、直接「実体」とみなされているわけではない。「概念」に、「満たされ終えた」という形容詞が、「神」によって付与される。このことを論拠として、「存在」に、「完全に満たされた」という形容詞が送り返される。この「完全に満たされた存在」が「個体的実体」である、と承認されるのだ。また、「概念」と「主語」という局面でいえば、『叙説』においては、満たされ終えた「概念」が属する「主語」が「実体」として承認される。こうした主語から、「満たされ終えて」いない「概念」が属する「主語」が分かれていのである。「概念」において、「実体」とみなされうる「主語」と、そうではない「主語」とは見分けられる。この両者を見分ける、ということを成立させる枠組み、および基準を提出すること。これが、「個体的概念」を核とした「個体的実体」論の試みであった、と理解されねばならない。

注

原典は、『叙説』に関しては、Lestienneの校訂版 (*Discours de métaphysique*, J. VRIN, 1994) を用いた。引用は項番号で記す。その他は、アカデミー版 (Leipzig: *Samtliche Schriften und Briefe*, Hrsg. von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Darmstadt) (略記: A) を用いた。翻訳に際して「ライプニッツ著作集第八巻」(一九九〇年、工作舎を参照させていただいたが、訳文および訳語を変更した箇所がある。

- (1) 山田晶「トマス・アキナスの〈レス〉研究」、創文社、一九八六年、六四四・六五二頁参照。
- (2) フィンランによれば、Fichant, *Discours de métaphysique suivi de Monadologie et autres textes*, Gallimard, 2004, pp. 46-47。デカルトは「十全なる事物」(res completa)と「自らの形相および属性を帯びた実体」(とを同一視している) (Œuvres de Descartes, publiées par Adam & Tannery, Vrin, 1964-1974, VII, 222 et IX-1, 172)。言い換えれば、完全に満たされていること[「十全性」(complétude)と、帰属させること(attribution)とが等価値とみなされているのである。ライブニッツにおいても、たとえば一六七六年の時点では、「実体」と「完全に満たされた存在」とは同一視されている(A VI, 3, 400)。ここでは「事物」(res)および「存在」(ens)において「完全に満たされていること」という「実体」の基準が達成されてしまう。これに対して、この基準が、「事物」や「存在」から「項辞」や「概念」に移されることによって「叙説」においては「ノミナリスム」の立場が十分に踏まえられたうえで、「個体的実体」論が構築されるのである。
- (3) M. Fichant, *op. cit.*, p. 47.
- (4) M. Fichant, *op. cit.*, p. 42.
- (5) M. Fichant, *op. cit.*, p. 44.
- (6) M. Fichant, *op. cit.*, p. 44.
- (7) ここで具体的に念頭に置かれているのは、自然界における「能動作用」には必ず「神」が関与していると考えられる「機会原因論者」の立場と、同一の運動量を保存するだけの「神」が想定されているデカルトの立場である。つまり、ここでの困難さの正体とは、「自然学」の問題、とりわけ「物体」の作用や運動をめぐる問題に関わっている。「物体」に帰属されるべき「能動作用」に、「神」の働きは、どのような範囲で、どの程度 関与しているのか。このことが見定められなければならない、自然の内の「実体」を確立する、ということではない。こうした問題が背景に控えている。
- (8) アリストテレス『範疇論』五二を参照。
- (9) ただし、アリストテレスにおいて、「普遍」は、「概念」ではなく、事象性を有していた。範疇のなかで、「最低種」は最も個体に近いものとして「ウシア」と呼ばれていたのである。この点については、山田晶前掲書、三二一頁および三二九・三三一頁参照。したがって、アリストテレスにとっては、類や種といった普遍について語る、ということとは、単なる論理学の範囲における語り分けに留まらず、「個物」には至らないまでも、事物の内容性を付与することでもあったのだ、と言えよう。
- (10) 山田前掲書、二八二頁参照。
- (11) 山田前掲書、二八三頁および六一頁、注1を参照。
- (12) 八木雄二「スコトウスの存在理解」、創文社、一九九二年、二七頁
- (13) 「述定」は「事物の本性」に根ざしていなければならないという立場、言い換えれば、論理的に語られることが「事物の側に根拠を有する」という立場、すなわち「レアリズム」の立場(への復帰)が、ライブニッツによって明確に表明されている。このように評価することができるよう思われる。本論考では、中世の「普遍論争」に由来する「ノミナリスム」と「レアリズム」という系譜から見た、ライブニッツ哲学の評価について詳しく扱うことはできない。この点については、山内志朗「普遍論争——近代の源流としての——」、哲学書房、一九九二年、稲垣良典「普遍論争再考」、『大航海』No. 61、二〇〇七年、三六―四四頁、ならびに、同雑誌所収の、清水哲郎「中世普遍論争——何が争われたか?——」、八二―九三頁を参照。
- (14) 「個体的実体」ないしは「完全に満たされた存在」と対比されるのは、「偶有性」(accident)という「一つの存在」(un être)である。「偶有性」は、「その概念が現に帰属される主語に帰属される

うるすべてのものを内に含んでいないような、一つの「存在」である（第八項）。偶有性という「存在」の「本性」とは、その「概念」が「主語に帰属されうるすべてのものを、内に含んでいない」ということである。偶有性という存在は、その「概念」が「満たされ終えて」いないがゆえに、完全に満たされていない「存在」と呼ばれうるだろう。

(15) 『叙説』第十三項には、「本性あるいは概念」とか、「概念あるいは本性」「主語の有する、完全な概念の本性 (la nature d'une telle notion parlée d'un sujet)」といった言い回しが見られる。「実体の本性」を明らかにしようとする、「概念」の「満たされて終えて」(accompli) いること、ないしは「完成されて」(parfait) いることへと行き着く。こうした事情が、上のような言い回しでは圧縮されて言い表されている、と解釈できよう。

(16) 「イデア」「観念」と「概念」との関係については、拙論「ライプニッツ『形而上学叙説』における観念と思考について」、『フランス哲学・思想研究第十一号』、日仏哲学会、二〇〇六年、二七—三六頁を参照されたい。

(17) 「概念」「イデア」「観念」「事物」の関係については、前掲拙論、二九—三〇頁を参照されたい。

(しみず・ひろき 筑波大学大学院
人文社会科学研究所 博士特別研究員)